



# 新札幌市史

完結記念シンポジウム  
－史料から歴史を探る－

〈開催報告書〉

平成20年3月28日(金) 14:30～17:30  
札幌パークホテル

主催：札幌市

# 新札幌市史

## 完結記念シンポジウム － 史料から歴史を探る －

司会：春の陽気がひと休憩といった陽気ではありますが、本日は新札幌市史完結記念シンポジウムに、大勢の方にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

シンポジウムでは、テーマを「史料から歴史を探る」とし、講演会とパネルディスカッションを予定しております。

本日の司会を務める文化資料室長の伊藤でございます。よろしくお願いたします。開会にあたりまして、主催者を代表し、札幌市総務局行政部長浅野清美よりご挨拶を申し上げます。

### 主催者あいさつ

札幌市総務局行政部長 浅野 清美

みなさま、こんにちは。ようこそおいで下さいました。開会にあたりまして一言ご挨拶を申し上げます。

本日は朝からみぞれ混じりの雪が降り、気温も相当下がりがりまして、外出するのも大変なところ、多くの方にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。主催者として厚く御礼申し上げます。

本日の進行についてご説明します。シンポジウムといたしまして、東京大学の史料編纂所教授でございます山本博文さんからご講演をいただきます。「新史料から探る大奥と篤姫～史料から歴史をひもとく」と題しまして、親しみを持っていただける講演を工夫されたようで、NHK大河ドラマである篤姫の話も交えまして面白い話が聞けるかと思えます。その後、パネルディスカッションとしまして、「新札幌市史をどう継承するか」をテーマに討論する予定です。

『新札幌市史』は、札幌創建120年を記念しまして開始された事業でございまして、文化資料室に市史編集室を開設してスタートいたしました。27年の歳月を掛けて、この3月25日に最終巻でございます第8巻2「年表・索引編」が刊行されまして、完結に至りました。

昭和56年の開始時を振り返りますと、そのとき札幌市は100年に1度あるかないかという大洪水が起こりまして、その後バブルがあったりはじけたり、空白の10年があったりしまして、ようやくこの度完成しました。開始当時の板垣市長、桂市長、現職の上田市長の3代に渡りまして、市史編集の編集長も初代の高倉新一郎先生、今日海保洋子さんまで4代に渡って続いて参りました。編集員も名だたる方をお願いしまして、最盛期には11名の編集員で執筆されたこともありました。

市史の編集・執筆の基本方針としましては、「広い視野と清新な歴史観に立って札幌の歴史を通観できる豊富な内容を盛り込み、時代範囲は先史時代から現代まで歴史の流れを全体的に叙述する」としております。

「通史5巻上」では都市最高水準に属する都市研究とも評されました。『文化が薫る都市の魅力が輝き、にぎわう街』を政策目標とする札幌市としても、札幌市民としても、この『新札幌市史』を活用することによってさまざまな成果が生み出されると思えます。このことを祈念いたしまして、開催の挨拶とさせていただきます。

### 講演会

新史料から探る大奥と篤姫～史料から歴史をひもとく 1

講師／山本 博文氏(東京大学史料編纂所教授)

### パネルディスカッション

新札幌市史をどう継承するか 6

パネリスト／海保 洋子 (新札幌市史編集長)

〃 田端 宏氏(北海道史研究協議会会長)

〃 太田 幸雄氏(白石の歴史を語る会会員)

〃 茂内 義雄氏(手稲郷土史研究会会長代行)

〃 石黒 進 (札幌市市政推進室長)

〃 山本 博文氏(東京大学史料編纂所教授)

コーディネーター／榎本 洋介 (新札幌市史編集員)

アンケート調査結果 13

# 「新史料から探る大奥と篤姫～史料から歴史をひもとく」

昭和32（1957）年岡山県生まれ。東京大学文学部卒業、同大学院修了。文学博士。現在は東京大学史料編纂所教授として、日本近世史を専門とされ、専攻は近世政治・外交史の研究及び近世武士の研究。著書には『幕藩制の成立と近世の国制』など多数あり、『江戸お留守居役の日記』（講談社学術文庫）では第40回日本エッセイスト・クラブ賞受賞。



講師／山本 博文氏  
東京大学史料編纂所教授

「新史料から探る大奥と篤姫」としてお話しさせていただきますが、まずは『新札幌市史』の完結おめでとございます。大変立派な市史ができて、我々も喜ばしい限りでございます。

今回お話しする篤姫は、北海道から遠く離れた鹿児島ですが、北海道とくに札幌の方は東京から来ている人も多いように、ほかの地域に比べると都会的な人が多いように思われます。

今年はNHK大河ドラマで篤姫を放映していることもあり、もともと鹿児島薩摩藩の研究がテーマの一部でしたが、最近は大奥の研究をしているため、各地で篤姫に関する講演をさせていただいております。最近書いた『大奥学事始め』（日本放送出版協会）という本も、あわせてご覧いただければと思います。

ドラマ「篤姫」は随分人気があるようで、私もそれに関した講演をするためずっと見ていますが、ホームドラマのようでおもしろいドラマになっていますね。ただ、歴史学者として見ると、おかしところはたくさんありまして、大河ドラマというより「あんみつ姫」のような感じもします。

ドラマ「篤姫」の中で、肝付尚五郎という篤姫の幼なじみが、篤姫の家を訪問して、ひとりで提灯を持ってしょんぼりと帰ってくるシーンがありました。しかし、当時はこんなことはあり得ないのです。肝付というのは、鹿児島藩では領地を持っている上級家臣で、いくら子どもであっても町を歩くのに草履と提灯をもつ人間を連れずに歩くのはおかしいのです。

鹿児島藩は、江戸と違って子どもの頃からの武士道教育が大変厳しく、二才教育といって（若者のことを二才という）、男同士が共同体として勉強や武道をします。そこで学ぶのは、嘘をつくな、敵に後ろを見せるな、恥ずかしいことはするな等。また鹿児島藩特有ですが、鹿児島藩は男尊女卑のお国柄で、女は汚いものだという教えがあります。だから、篤姫と肝付尚五郎が道端で話しをするなんてあり得ないのです。こういうところを細かく検証すると、もっと楽しく見られるのにはと思いますが、あまり細かすぎるとドラマにならないので、ドラマはドラマとして楽しんでいただければと思います。

今回は「大奥と篤姫」についてお話ししますが、篤姫は5～6年ぐらい前まで知っている人はほとんどいなかったと思います。鹿児島の人なら知っているかもしれませんが、全国区ではあり

ませんでした。大奥と同じですが、以前フジテレビで「大奥シリーズ」をやっております、人気があったんですね。大奥のことを知っている人が増えました。大奥も篤姫もいまでは全国の人が知っているので大変喜ばしい限りです。

「新史料から探る大奥と篤姫」ですが、これは徳川家の正室の話。歴代将軍の正室は、基本的に五摂家といわれる摂政関白家の娘、あるいは世襲親王家の娘のどちらか。徳川家は内大臣・征夷大将軍なりの家格ですから、相手もそれに相応しい家格の人である必要があります（図①）。

しかし、11代将軍家齊のとき島津寛子が正室になります。これが大きな変化。近衛家の養女になって嫁いでいるので、近衛家からの嫁であるのは間違いないわけですが、ここで大きな断絶ができます。でも、突然ではないのです。前史として徳川家と島津家との深い関わりがあるので、これからお話しします。

13代将軍家定の正室は篤姫ですが、家定の死後落飾して天璋院になります。篤姫は正室といっても3人目の妻で、島津家から嫁いでいます。

篤姫は、今和泉島津家の当主・島津忠剛の娘に生まれ、島津本家当主・島津斉彬の養女となり、幕府には実子として届け、さらに近衛家の養女にして、家定に嫁がせています。養女の養女ではだめなので、斉彬の実子にする必要があったのです。幕府には秘密のように見えますが、実は幕府も知っていて、手続を整えるために実子として届けたのです。

ちなみに、篤姫の実父・島津忠剛という人は、歴史の中で実績というのはほとんど残っていない、知られているのは、篤姫の実父ということぐらいです。

江戸城は、幕府の政庁にあたる「表」、将軍が執務を行い普段の生活空間でもある「中奥」、そして「大奥」に分かれています（図②）。

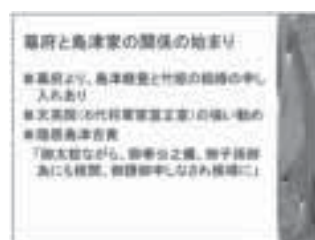
将軍が大奥に行くときは御鈴廊下を通り、「上様のおなり」となる。ただ、女中達がずらっと並んでというのはなかったようです。まだ詳しくはわかっていません。



図①



図②



図③



図④

大奥の内部は御殿向・長局向・広敷向の三区区分されています。御殿向は将軍の寝所である御小座敷、御台所の居所である新御殿、側室や奥女中の詰所などからなります。将軍が御小座敷にはいると、御代様と将軍付きの中臈あるいはお年寄りが一緒に挨拶に行く。毎日、朝と夕方に行う「総ぶれ」というもの。朝の総ぶれは10時ぐらいで、その後は御台様と一緒に御仏間で先祖の供養をします。長局向は奥女中たちが住むところで、格式に応じて一之側、二之側、三之側、四之側とあります。大奥にも男子の役人がいて、警備や出納をするのが広敷向です。

幕府と島津家の関係は、以前に島津家と近衛家が婚姻を結んだのが始まり。島津家は近衛家の代々家来で、もともと島津忠久という人が源頼朝の庶子だといわれていますが、実は近衛家の家司の出だという説が有力であります。その関係で中世以来、近衛家と関係があり、近世になって近衛家と婚姻を結ぶ。その後、幕府から当主・島津継豊と竹姫（吉宗養女）との結婚話がありました。

はじめは竹姫との縁談を島津家が断り、竹姫は会津の保科家へ嫁ぐこととなりますが、相手が婚約前に死亡し、また次の婚約者も死亡し、ある程度年齢がいったしまったのです。折しも、継豊の妻も亡くなり、竹姫との結婚話が再び出てきたのです。このとき、大きな働きをしたのが天英院という6代将軍吉宗の正室。「島津家のことは昔から特別に思っていて、將軍家としてもそう思っている。ぜひ、竹姫を嫁に」と願ったのです。

継豊の父・島津吉貴は「將軍家の娘と結婚することは、お金もかかるし、格式を整えなければならなくて大変だけど、幕府への奉公になるし、子孫のためにもなるから受けるべき」と助言します(図③)。

吉貴は、自分の子どもの継豊に、当主だから丁寧な言い方をしています。要は「引き受けた方がいいのでは」ということです。結局、継豊と竹姫は結婚し、宗信、重年、重豪、茂姫という後々の島津家の人々に大きな意味をもたらします。継豊は長く当主を務め、島津家は財政再建を果たし、雄藩として羽ばたくのです(図④)。

重豪は、幼い頃から竹姫が育てた子。一橋家の宗尹、その子どもが治済、妹に保姫がいます。吉宗の三男が宗尹ということは、竹姫の弟が宗尹ということ。だから竹姫は弟の子どもと、手塩に掛けて育てた重豪を結婚させたいと思うわけです。

重豪が保姫と結婚し、その子が茂姫で、一橋家との婚姻をもちたいということから、豊千代に見合わせることを考えます。一橋家としても島津家は、加賀百万石の前田（伊達と島津は同格）に次ぐ大きな藩なので、婚姻が成り立つのです。ところが、10代将軍・徳川家治の子ども家基が亡くなり、豊千代が養子となって將軍家を継ぐこととなります。この豊千代が、後の家斉です。豊千代が將軍家を継ぐということは、大名家と結婚はあり得ない。重豪は「竹姫様の遺言で成り立っている婚姻」なわけで、自分の妻は保姫で一橋家とは非常に関わりが深いことから、茂姫を近衛家の養女にして豊千代と結婚させます。そして重豪は幕府の舅の地位を獲得するのです。

家定の場合、鷹司政通の末娘と結婚するが疱瘡のため25歳で死去。その後、一条忠良の娘・秀子と結婚するが嘉永3年6月に死去(図⑤)。

ドラマでは家定はバカのように描かれていますが、実際に発達障害的なところがあったようです。しかし、いろいろな史料を見ると、首を傾げる仕草はしていたようですが、優れたところもある人で、当時の老中も「家定公は、世間からバカだと言われているが、鼻真目に考えなくても大名の真ん中ぐらいにいる」と。あんまり良くはないが、劣ってもないと。ただ、精神的には弱いところがあり、自分の妻に二度も先立たれ、「体の弱い公家の嫁は嫌だ」と。そこで、島津家に白羽の矢が立ったのです。

島津家には「京都は嫌だ。広大院様のときは、幕府が繁盛した例があるので、島津斉彬に娘があれば正室に迎えたい」と幕府から打診がありました(図⑥)。家斉は、正室の子と側室の子を含めると全部で53人の子どもができた將軍。子どもが多いのは大変だけど、幕府としては繁盛だったのです。

斉彬に娘がいなかったので、島津忠剛の娘を実子として届けます。斉彬も娘をもうけましたが、運の悪いことにすぐ死んでしまう。病死なんですけど、斉彬の父親・斉興の側室お由羅は、江戸の船宿の娘で大変美人だったといわれており、お由羅は自分の子どもである久光を藩主にしたくて、斉彬の子どもを呪い殺している…当時の薩摩藩の藩士は信じていて、お家騒動も起きたほど。

そのため、島津忠剛の娘一子を実子とすることとし、老中の阿部正弘も了承していました。

一昔前の説ですが「篤姫を幕府に送り込むのは、利口ではない家定に、その跡継ぎに利口だと思われていた一橋慶喜を養子にするよう説得するため」という話がありました。まったくの嘘ではありませんが、やはり茂姫のとき幕府は繁盛したから、体の丈夫な島津家の娘を嫁に欲しいというのが本当のところのようです。

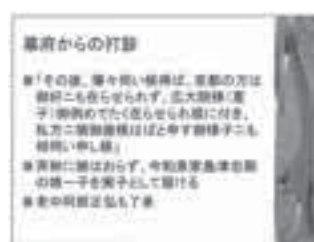
それを受けた斉彬は「広大院様が生きていたとき、幕府と島津家との関係はよかったし、薩摩藩も優遇されていた。いくら虚説を流されても將軍家の親戚ということで、突っ張り通っていたが、その人がいなくなったのは大きい。でも、島津家から御台様を出せば、虚説があっても気にすることなく、海岸の手当や奉公に励める」と(図⑦)。

虚説というのは、当時、島津家は外国（主に中国）と密貿易して、長崎や京都に送って、薩摩藩の蔵屋敷から唐物として売って大儲けしていると。つまり、幕府において、島津家の確固たる地位を維持するためにも、斉彬にとってこの婚姻は必要だったのです。

嘉永6（1853）年、一子を実子として届けて篤姫とします(図⑧)。自分の子どもをすぐ幕府に届けることもあるが、ある程度大きくなってから届けることもあります。だから、世間に出ていなくても実際は子どもがいることはあって、丈夫届けとして幕府に公認してもらっていました。ひどいところだと、対馬



図⑤



図⑥



図⑦



図⑧

藩は、丈夫届けを出している子どもがいて、その子が突然死んでしまったとき、もう一度届けを出すのも大変なので、その弟をすり替えて名前を変えて、跡継ぎと認めさせたこともある。幕府はその実情を知っていても、手続きさえ整っていれば、見逃すというのが慣例でした。厳しくすると大名家を潰さなくてはいいけないし、潰しても後釜が役目を果たすことができないこともあるから。幕府と大名はいい関係だったんです。

一昔前の江戸幕府の研究では、「幕府は大名が失敗するかを見張っていて、なにかあると潰してやろうと思っていた」という説の方も多いです。でも、実際はそんなことはなく、世の中安定しているわけですから、「大名には領地を治める役割があって、それを存続させよう」としていました。

一子を実子として丈夫届けを出したとき、老中の阿部正弘は、「実子と届けて、その後に近衛家の養女に」と指示します。

同年6月3日ペリー来航。篤姫は6月5日今和泉邸から鹿児島城に入る。鹿児島城には6~10月しかいないのに、たまたま12代将軍家慶が死亡して、子どもの家定が将軍になります。

家慶は有名ではありませんが、優れた将軍でした。先代の家斉は、文化文政時代の社会が贅沢になった時代の将軍で、側室も子どもも多く幕府の財政は困窮していました。家慶は財政を立て直すために頑張り、彼が重用した老中の水野忠邦は天保の改革を成し遂げ、自分は三代将軍家光の再来だと思っているほどだったとか。そして、自分の子どもの家定が時々変な行動をすると心配していたそうです。

同年10月、篤姫は江戸に到着。江戸に着くと、すぐに結婚できるかと思うと、嘉永7年には日米和親条約が締結され、安政2年には江戸の大地震があったことから延び延びになって、ようやく安政3年に結婚。

当時家定は33歳、篤姫は21歳。いまでいうと若いですが、当時は10代で結婚するのが当たり前。茂姫の時は3歳から一橋家で御台様として育てられ、ある程度の年齢になって結婚させています。結婚するときは、小さいときから相手の家風に合わせて育てるとというのが、高貴な家の原則ですが、篤姫は21歳まで薩摩藩にいたので、言葉使いもたぶん薩摩弁が残ったに違いないと。でも、薩摩の町で育っているわけではないので、屋敷の中ですから、共通語というか文筆を習っていたと思いますが、普通の御台様とは随分違っていたらと思う。斉彬も江戸で茂姫に育てられているので、国元に帰っても家臣が何を言っているかわからなかったようです。篤姫は逆の意味でつらかったと思います。篤姫が結婚して幕府に入るとなると、近衛家の娘であっても薩摩藩から入ってくるのがわかりますから。

水戸藩主の徳川斉昭は、「自分たちの祖先である東照宮（家康様）の敵である薩摩の家来の娘を御台様にするのは、御腹様（家定の生母）をはじめ、旗本の娘（大奥の女中達）たちを、薩摩の家来の娘にお辞儀させること。自分の益さえあればいいと思うから、大変なことが世の中に起きるんだ」と、越前藩主の松平春嶽に言ったそうです（図9）。

大変なことというのはペリー来航です。篤姫が嫁にならなくてもペリーは来たわけですが、斉昭にしてみると、こんなこと

が起こるのも阿部正弘のせいだと思うのです。阿部正弘は斉昭を随分気にして、阿部正弘と徳川斉昭の往復の手紙は非常にたくさん残っています。阿部正弘は斉昭をおだてたり、なだめたり、すかしたりして、自分の力になってもらえるように努めました。そんな苦労があって、阿部正弘は早死にしています。

家定と篤姫の仲がどうだったかという、実はけっこう仲が良かった。これが今回のテーマとも関係してきます。小説ならいくらでも書けますが、史料を見て、ふたりの関係を知りたい。知ったからといって、歴史学の上でどうということはないけど、歴史というのは、自分の知りたいことについて、できるだけ本当のことを知りたい気持ちがありまして、私もこういう史料は好きです。

斉彬が春嶽（当時は松平慶永）に送った手紙に「本当のところ（大奥でのこと）はわかりませんが、内々で聞いたところでは、家定と篤姫の間柄はよいので、子どもが生まれるのを待ってみましよう」（図10）。

大奥女中の幾島から「子どもが生まれるのを待ちましよう」とあったようです。この幾島は、大河ドラマでは松坂慶子が演じていて、美人のように思われますが、実は顔にコブのある怖い人で、女中達からは「コブ、コブ」と言って恐れられていたそうです。

つまり、篤姫に工作をさせて、家定の養子に一橋慶喜をたてようというのが、伊達宗城と松平春嶽の企み。その同志が斉彬ですが、斉彬は自分の娘を御台様にしているから、篤姫に子どもができるのが最善です。そこで、企みをちょっと待ってほしいというのが、この史料です。

しかし、篤姫はしっかりしていて、斉彬から命じられたことを忘れてはいなかったのです。篤姫は家定に「養子をとったらどうか」「養子は慶喜がいい」と言い、その顛末を極密として斉彬に送ります。そして、斉彬がその内容を写して、松平春嶽に送ります。間接的ですが篤姫の様子が変わり、家定が何を言ったかもわかります。これは貴重な史料なんです（図11）。

家定は「養子をとることを大名から要望されるなんて、とんでもないこと。一橋は嫌い。大奥も一橋を嫌っている。こんなことが叶うわけがない。それなのに、自分の妻の父までこんなことを言うなんて。篤姫がいるのに、上を侮っているとしか思えない」と返答したようです。とても正当な感覚です。そういう意味では、自分の娘を御台様にして、その御台様から養子をとれと言わせるなんて、名君といわれた斉彬は正気の沙汰とは思えません。

一方、篤姫の気持ちは「このような大切な命令を受けながら、そのまましておくのも非常に残念で、悔しくて、上手くいかなかったという返事ですみません」と残っています。

家定と篤姫の結婚生活はどうだったかという、たぶん篤姫とのお泊りもあったと思われます。家茂付中臈箕浦はな子が「13代様は、大奥に泊まるのが好きではないので、お泊りは月



図9



図10



図11



図12

1～2度と少なかった」と答えています(図⑬)。大奥では総ぶれは毎日ありますが、法事の時などは奥泊まりができません、毎日奥泊まりはできません。

家定には、気に入った中臈がひとりいました。将軍付きの中臈は6～8人いて、自分の好みがいれば何人でも側室にできます。家定の側室となったのは、お志賀という中臈で、「さほど美人ではないけど、綺麗に見えた」そうです。でも、家定もお志賀に一筋ではなく、「好みの人は2～3人いたけど、お手が尽きませんでした。それというもお志賀は気が強くて、御台様にお泊まりが1度あれば、自分には2度お泊まりがないと承知しないという感じで、他の者をお側に出さなかった。お志賀は側を離れず、一橋が大奥に挨拶に来たときも、お世話をしていた」(図⑭)。

お志賀は気が強く、気の弱い家定は、気に入った中臈がいても手を出せなかったようです。そして、篤姫のところにお泊まりがあったのも、この史料からわかります。

これは明治になってからの聞き書きですけど、お志賀のこと、家定の雰囲気がよくわかりますね。奥泊まりが月1～2度で、お志賀もいるから、篤姫も退屈なわけです。そこで動物好きの篤姫は猫を飼います。

「篤姫は狎(犬)が好きだったけど、家定は犬が嫌いだったので、猫を飼いました。最初にいたのは死んでしまい、その後中臈の飼猫が生んだ子猫をもらい、サト姫と名付けました。精進日には魚類がないので、エサにはどじょうやカツオ節をあげていて、そのエサ代は1年に25両(1両10万円として250万円。20万としたら1年に500万ぐらい)。篤姫が食事の時に、猫のお膳も出る。猫は直に畳の上で寝ないし、篤姫の裾の上に寝る。猫用の布団があって、その上で寝たりしていました」(図⑭)。

偉そうな猫ですね。この猫はいろんな所に行くようで、さかりの時は庭に出たりする。すると中臈は「おサトさん、おサトさん」と呼びながら探す。「言い方がおかしい。そんなことでは帰ってくるものも帰ってこなくなる」と、周囲で笑ったとか。あるいは、猫が御三之間に出てきて、女中は「おサト姫様お間違え」と言うと、言葉を理解して篤姫のところにとぼとぼ帰ったということが聞き書きで残っています。微笑ましい一幕ですね。有名なエピソードなので、ドラマでも取り上げられるでしょう。注目していただければと思います。

安政5年の4月、箱根藩主の井伊直弼が大老に就任。この井伊直弼が独断専行を行い、紀州藩主の徳川慶福を将軍継嗣とします。これが14代将軍の徳川家茂。その後、家定は江戸城で死去して、8月8日には家定の喪が発表されます(図⑮)。

この過程で諸大名や幕府周辺の人達は、大老には松平慶永を推していました。しかし家定は「大老の井伊家にいい人材がいて、越前から起用する必要はない」と、井伊直弼を大老にしました。そういう意味で、家定は決定力を持っていました。流されるだけではなかったんです。

ただ、この直弼というのが、若いとき不遇だったこともあって、輪を掛けて強情な人でした。兄弟が多くて、そのままでは跡継

ぎになれない状態だったが、兄達が死んで、近江彦根藩主になったのです。苦勞しているだけに果敢な人物。

直弼は大老に就任するや、家定が言ったとして、慶福を14代将軍にします。慶福は家斉の孫ですから、幕府としては関係が近く、大奥も慶福が将軍になるのがいいと思っていて、特異な選択ではなかったのです。

しかし、徳川斉昭や松平慶永は大反対します。斉昭は「このままだと今の日本は支えられない」と言うが、実は、自分の子ども・慶喜を将軍にしたかったようです。斉昭は利口ですからそれを直接口にしない。将軍継嗣騒動について「実は、あの人に騙されたかもしれない」と、松平春嶽は明治になってから語っています。

新しく見つかった史料があります。全部で70通の手紙です。東京の古本屋から「女文字の手紙で奥女中のものかもしれない」と連絡があり、送ってもらったものです。女文字の書状というのは、慣れないと読みにくいのですが、最初の2～3通を見ると「順聖院様」という言葉が出てくるんです。これは島津斉彬の戒名なので、薩摩藩関係の女中の手紙に違いないと思いました(図⑯)。

当時の手紙は折り紙のようになっています。だからドラマで大きい手紙を、ぱらぱら読むのは間違いなんです。この手紙は、局(つぼね)が、薩摩藩女中に宛てたもの。局(つぼね)というのは、篤姫が御台様になったときの幾島の名前です。部屋頭を局といいますが、この人は局を自分の名前にしたんです。

この手紙には「いつも願ひ事で申し訳ないけど、薩摩の赤味噌がなくなったので、藩邸から少し分けてもらえませんか。天璋院様は、薩摩の赤味噌じゃないと、なかなか手を付けてくれないのです。お願いします」とあります。

薩摩藩の江戸藩邸と江戸城の大奥は手紙で結ばれていて、手紙と共に情報もやりとりされていました。篤姫が落飾して天璋院になってからの薩摩藩との関係とか、篤姫の嗜好とかがわかる貴重な史料ですね。

最近、古本屋から史料がよく出てきます。奥女中関係の文書は東京の多摩地方にも結構ありまして、この辺の人は奥女中にはなれないけど、奥女中が使う女中に農村の娘がなっていて、その娘達が実家に送った手紙が残っています。

これらを発掘して『江戸奥女中物語』という本を書いた畑尚子さんという研究者がいらっしゃいます。その著書の中で「家定が死んだとき、これは尾張がやった毒殺だ」という一節があって、これは大奥の単なる噂なんですけど、家定が死んだときの大奥の嘆きとか、もし殺されたとしたら水戸か尾張だとか、大奥の雰囲気を示しています。

史料はどこから出てくるのかわからないし、どこの人が持っているかもわかりません。新たな史料が見つかることで、今までわかっていた歴史がもっと深くなったり、全く違う考えができるようになったりするので、史料がないと新しい考えは思いつきません。



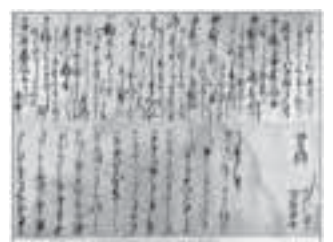
図⑬



図⑭



図⑮



図⑯

天璋院と和宮についてもお話しをします。

天璋院と和宮は仲が悪かったが、あることから仲が良くなった。どうして仲良くなったかという、「浜御殿に天璋院と和宮と将軍の三人で行ったとき、踏み石の上に天璋院と和宮の草履があって、将軍のは下にあった。天璋院は先に降りたけど、和宮はそれを見て、ポンと飛んで降りて、自分の草履をどけて将軍の草履を上げてお辞儀なされた。それで天璋院と和宮の女中達の反目が収まった」と勝海舟が言っています(図⑭)。

でも、天璋院と和宮が仲良く浜御殿に行ったことはなかったと、畑尚子さんは指摘しています。こういうことがあったら楽しいだろうと思う話です。和宮のように京都で育った女性が、縁側から飛んで降りることはできないので、勝海舟のホラ話だろうと思われま。

幕府が崩壊するときの話です。幕府が鳥羽伏見の戦いで負けた時、天璋院を薩摩に返して矛先をおさめようという話がありました。ところが天璋院は「薩摩に帰ることに対して大変不満で、『なんの罪があって里に帰すのか。一步でもここは出ません。無理に出せば自害する』と昼夜懐剣を離さない。同じ年のお付きが6人いたけど、それもみな自害すると言うので手出しはできない。どうにもこうにもならない」と勝海舟が言っています(図⑮)。これは本当だと思います。天璋院は「自分の運命は徳川家と共にする」という意味で言ったのでしょうか。

事実、天璋院は官軍の隊長宛に手紙を書いて徳川家の存続を願っています。「徳川家の嫁になったからには、自分は徳川家の土になるつもりだから、徳川家を存続させたい。夫の家定はすでに死んでいる。もし、これで徳川家がつぶれることになったら、自分は死んでも夫に会わせる顔がない。その心の中をお察し下さい。徳川家の存続をお許し下さい。それは自分の命を救ってくれるよりもなおうれしい」と、痛切な手紙を官軍隊長宛に送っています(図⑯)。

天璋院は慶喜が嫌いだった。突然家茂が死んで、自分は女の身なので、その後のことを話せないうちに、老中達が慶喜を将軍にしてしまった。それは痛恨の出来事だけど、ひどいことはしなと思っていて。ところが、新政府軍との鳥羽伏見の戦いで錦の御旗を出すという、とんでもないことをして標的になった。申し訳ない。だから、慶喜はどうなってもいいけど、徳川家は存続させてほしいと。

結果、徳川家は存続を許されました。この手紙によるかはわかりませんが、大きな役目を果たしたと思います。当時の官軍隊長は同郷の西郷隆盛。西郷がこの手紙を読んで、徳川家を潰すわけにはいかないと考えたかもしれません。

また、和宮も京都に「自分の身はどうなってもいいから、嫁いだ徳川家を救って欲しい」と手紙を送っています。

新政府軍の中心は薩摩藩で、命令しているのは朝廷。朝廷出身の和宮、薩摩藩出身の篤姫が、共に手紙を送って徳川家の存続を願った。政治的にも潰さないことが得策と考え、最終的に存続したのではないかと思います。

この時代の将軍家御台様は、出身藩や家柄が特殊ですから、

幕末の政治に大きな役割を果たしたことは間違いありません。女性は政治の世界になかなか現れませんが、この時代の身分の高い女性は歴史の一端を担っており、実はある程度政治を動かしていたことが感じられます。

それに引き替え、慶喜はきちんと戦わず逃げてくるとは何事だと思わけてですが、考えてみれば、慶喜の父親は水戸の徳川斉昭で、母親は有栖川家の娘。斉昭も女性好きなので子どもはたくさんいますが、水戸家を継いだ兄・慶篤と、慶喜は有栖川家の娘の子どもなんです。

慶喜自身は徳川家というより朝廷に対する気持ちが半分以上あり、エリート意識もあった。だから、徳川家のためというより、徳川家と朝廷の間をつなごうと生きているので、朝廷から何か言われると、徳川家よりそちらのことを考えてしまう。そういう性格を小さい頃から、政治をするようになってからも持っている。鳥羽伏見の戦いでは自分の命が惜しくて逃げてきたというより、慶喜自身が朝廷を尊崇する気質を強く持っていたという方が正しいと思います。

篤姫の話を中心に、新しい史料、あるいは古い史料も読み込むことによって、当時の大奥の中の付き合いや話した言葉までが、より詳細にわかってきたことをお話したつもりです。新しい歴史像を想像ではなく、史料から知っていくことが歴史では必要だということを強調しまして、私の話を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

●司会：山本先生ありがとうございました。せつかつなので、ご質問がありましたらどうぞ。

●質問者：どうして、こういう個人の書簡が古本屋に入り、先生の手元に行くのか。どうして史料が残るのか教えてください。

●山本：局(つぼね)の手紙(図⑯)は、江戸城から薩摩藩の奥女中のところに送られたもの。残るとしたら薩摩だと思わんですが、東京に残っていました。どうしたことかという、恐らく、局(つぼね)は国元に帰るけど、いろんなものを自分が使っていた女中に預けたのではないかと思います。預けたのが、江戸の農村の娘なら、場所も広く、環境に変化がないから残りやすいのではないかと。そういうのがたまたま残って、回りまわってこちらに来たのではないかと推測しています。

●司会：時間になりました。興味深く山本先生から「史料から歴史をひもとく」の講演をいただきました。先生、どうもありがとうございました。もう一度、皆様から盛大な拍手をお願いします。



図⑭



図⑮



図⑯

# 「新札幌市史をどう継承するか」

## 〈基調報告〉

### 『新札幌市史』は何を書いたのか



新札幌市史編集長  
海保 洋子

●海保：この度、市史編集事業が27年の歳月をかけて完結いたしました。果たして、8巻10冊が市民の皆様の要望に応えられたか否か、時間の制約がありますので、具体的史料を数点挙げ、特徴・意義のようなものを紹介したいと思います。

#### I 近世（通史1）—松前藩政史・アイヌ史

札幌の近世史は、和人の歴史が筒型につながっていないためか、最も馴染みがうすい、都府県の中でも極めて歴史の断絶感が強い地域かも知れません。通史1の執筆当時、幸いにも北海道近世史研究は黄金時代を迎え、新たな史料の公開・発掘も重なり、史料編1冊に近世史料を収録するとともに、田端宏先生はじめ近世史研究者に多くの助言をいただき、通史700頁を編むことができました。

文字の上で「さっぽろ」なる名称が登場いたしますのは、17世紀中頃の近世蝦夷地最大の事件シャクシャインの戦いの際です。まず、「さっぽろのアイヌ首長チクナシ」（『寛文拾年秋蜂起集書』・北大北方）と、「はつしやふ」を本拠とし「おたる内」を持つとする「イシカリの首長ヨウタイン」（『津軽一統志』巻第十）なる人物が登場いたします。両史料ともにシャクシャインの戦いを記す弘前藩の文献です。札幌市周辺地域が当事者の一員の松前藩の文献ではなく、シャクシャインの戦いの渦中に初出する事実は、サッポロ地方の背負った歴史的役割を考える際に見落とし難い点です。チクナシとヨウタインの背後には大立て者が控えておりまして、チクナシの背後にはシュムクルの長オニビシ、ヨウタインには「上の国惣大将」（西蝦夷地の惣首長）ハウカセです。オニビシ、ハウカセともに広大な地域的統一勢力の長であり、両勢力の接点に現在の札幌市が置かれていた、言い換えますと、「さっぽろ」の文字への登場はこのような歴史的状況下に置かれていたことが注目されます。

私は、ハウカセの存在について申し上げておきたいと思えます。『津軽一統志』等にありますが、屈服させようとした松前藩に「松前殿は松前の殿、我らは石狩の大將に候得は、松前殿に構可申も無之候。商船此方え御越可被成も被成間敷にても別て構無御座候」と一蹴したは有名な言葉です。

【史料1】に挙げましたが、青森県叢書本の方には「大將（ハウカセ）日高に加勢と申候」（傍点筆者）が挿入されており、『新北海道史』本とは異なっています。定説ではハウカセは戦いへの参加を要請されたけれど、中立を保ったと言われておりますので、非常に謎めいております。シャクシャイン関係史料は、幕府・津軽家・南部家関係と多くの史料ありますが、特

【史料1】イシカリアイヌハウカセの存在

一 石狩 大川有 派にかゝり調有 川口に狄家敷を不知 其川の上へに七里典に上の国惣大將居城有 大將ハウカセと申候 下人狄千人程有

（『津軽一統志』第十下 『新北海道史』第七巻史料一 所収 昭和44年刊）

一 石狩 大川有 派にかゝり調有 川口に狄家敷を不知、其川之上七里典に上之國惣大將居城有、大將日高に加勢と申候、下の狄共千人程と出之。

（『津軽一統志』第十下 青森県叢書第六編 青森県立図書館青森県叢書刊行会編 昭和28年刊）

に「一統志」については、青森県叢書本、『新北海道史』本とがあり、前者は史料の誤読が多いが、両者の間には単にそれのみとは言いきれぬ相違があり、卓越した史眼で息を吹き込む必要性を感じた次第です。

シャクシャインの戦いの後、地域的統一勢力が解体し、商場知行制の基礎の確立された結果、石狩として単一的存在から、イシカリ川下流域に多数の個別知行権設定が可能となり、藩主以下13人の知行主に分割・零細化されます。現市域では、さつぼろ・はつしやふ・ナイホウ場所もその一場所となります（因みに、夏商の商品内容は、干鮭・熊の皮・狐の皮・兎の皮・数の子・油の類）。良質の鮭の獲れるイシカリ川河口は藩主の特分（直場所）、藩士は知行の替わりに給付された夏商交易権を行使するため船を操って交易相手である交易所まで赴き、直接アイヌと取引する形態です。しかし、17世紀前半頃より、そういった形態を、商人が一定の運上金を知行主に納入する替わりに場所取引を請負う方式に変化していきます。さて、市史では、サッポロを含むイシカリ十三場所の請負人として有名な村山家資料の公開という偶然に遭遇、「しやつぼろ」場所の請負証文を確認することができました。【史料2】の明和2年・1765年の文書です。場所請負制は、アイヌ民族にとって交易人（独立生産者）から漁場労働者（被雇用者）へと変化させた、まさにその入り口に相当する史料といえましょう。幕藩制にとって蝦夷地は、政治的には「異域」、経済的には「内国」との矛盾した性格をもっているといわれます。事実、19世紀前半、松浦武四郎の蝦夷地調査によって、アイヌ社会の崩壊の状況が明らかにされます。井上勝生先生の『開国と幕末変革』の中で「19世紀前半のアイヌ社会を「悲惨」の枠組みだけで見るのはアイヌ民族自身の歴史認識とも違っている」とのご指摘があります。田端先生も『札幌の歴史』54号で井上先生の文を引用されておられますが、新札幌市史の場合もそうでしたが、松前藩政「史」は書いてきたかもしれないが、アイヌの歴史としては、呑み込まれたか、そうでなかったのか、どちらに軸足を置くかによって随分視点が異なるわけで、一自治体史として反省点・悔いが残るところです。

証文之事

一 手箱支配所石狩しやつぼろ夏商場所 英和成之申上ノ年迄日高ノ申上ニ相違所無相違候。老ノ年二小相廿七兩相定、尤成之申上金之内小相拾四兩令請取、残額拾三兩三錢三月請取可申候。亥ノ年之分者成ノ五月、子ノ年分者亥ノ五月、丑ノ年分者子ノ五月申請取可申候。得亦於蝦夷地埋不取之儀候之様相心得可被申候。且指符之儀別紙ニ相認差違申候。急念仍面紙文加付。

明和乙酉四月十六日 南條安右衛門印  
村山伝兵衛

一 石狩 大川有 派にかゝり調有 川口に狄家敷を不知、其川の上へに七里典に上の国惣大將居城有、大將ハウカセと申候 下人狄千人程有

（『津軽一統志』第十下 『新北海道史』第七巻史料一 所収 昭和44年刊）

【史料2】石狩志と津保る夏商場所請負証文（北海道開拓記念館所蔵）

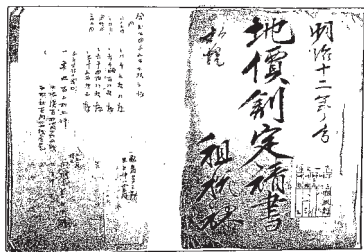
#### II 近代（通史2・3・4）—都市史・社会史をめざして

開拓使本庁のもとで、近代日本において、他の地域には見られない人工的・計画的な都市形成の歴史をもちろにかぶった都市です。町屋の形成、そして移民を招来しての農村の形成、殖産興業などなど、もちろん北海道史と重なる部分でもあります。「市史基本方針」に「そこに住み暮らしてきた人々の歴史であり、市政史に陥らず、市民生活の描写に重点をおき」とありますように、各巻ともに、都市史・社会史を目指しました。

まず、「二戸七人」の「伝説」は書き変えられたか、という問題に触れたいと思います。小中学校では、札幌の歴史を授業でとりあげる時、「明治二年二戸七人」しかない原始林を島判官が切り開いたことに始まるという「伝説」がまだに信じられていると聞きます。『札幌昔話』などにまとめられた内容を根拠にしているわけです。【史料3】に『地価創定請書』（道立文書館蔵）の表紙と史料編2に収録した表を掲げました。こ



これは、開拓使が取り組んだ土地に対するもっとも大きな事業の一つで、府県の地租改正に対応する事業です。現在の札幌市域に関しては、当時の市街地である町・そして周辺の村の宅地・耕地ごとに記載したのですが、項目欄に「割渡年月」が



【史料3】地価創定請書 渡島通 442頁参照 (道立文書館蔵)

番地	地主名	在籍地	反別	地価	地目	取当地区	割渡年月	備考
1	浜田安右衛門	発寒村	5,804	5,827	5,823	9,50	安6.8	明5前 自移
1	浜田安右衛門	発寒村	2,408	2,503	2,305	9,50		明5 明移
2	鈴木龍吉	発寒村	17,221	16,496	15,407	9,50	安6.7	明5前 自移
2	鈴木龍吉	発寒村	2,114	20,393	20,399	9,50		明7 明移
2	鈴木龍吉	発寒村	319	3,452	3,045	9,50		明7 自移
3	鈴木富作	発寒村	4,705	44,808	44,811	9,50		明5前 自移
3	鈴木富作	発寒村	2,209	21,185	21,118	9,50		明5前
3	鈴木富作	発寒村	2,813	27,116	27,121	9,50		明6
3	鈴木富作	発寒村	2,010	19,317	19,322	9,50	安4.10	明6~7
3	鈴木富作	発寒村	1,326	13,173	13,171	9,50		明7
3	鈴木富作	発寒村	1,318	12,920	12,922	9,50		明7
3	鈴木富作	発寒村	1,516	15,707	15,712	9,50		明7
4	坂本令直	発寒村	10,108	9,620	9,622	9,50	明5前	明7 自移 新築地33
4	坂本令直	発寒村	7,714	73,993	73,869	9,50		明7 33
4	坂本令直	発寒村	4,323	41,578	41,568	9,50		明7 33
5	笹原源吉	発寒村	6,628	62,637	62,694	9,50	万1	明6~6 自移 34
5	笹原源吉	発寒村	5,810	56,417	56,422	9,50		明6~7 34
6	青木力蔵	発寒村	14,726	140,473	140,465	9,50	安6.9	明6~7 自移 35
6	青木力蔵	発寒村	7,119	68,052	68,111	9,50		明6~7 35

あり、安政6、安政4、万延元年と記載されています。特に、発寒村をはじめ、札幌村、琴似村等はアイヌ民族はもちろんのこと、幕末の「在住」や幕府直営農場である「御手作場」経営によって招来された農民が近世村を形成させていました。史料編2は、昭和61年刊行ですので、20年以上前です。「二戸七人」は書き替えられたはずですが、小中学校へ市史をお送りしても校長室の奥の棚に飾られていると聞きます。教員・市民の皆様にもっと積極的に市史をお使いいただきたいと思います。

都市の性格上、政治史に片寄りがちになってもおかしくない訳です。そうはしたくないという意欲がありましたので、例えば「札幌生成期の社会と文化」という一項目を設け、草創期の札幌の構成者である官吏・商民・農民・アイヌ民族・女性たちをない混ぜにした札幌市民総体の姿を追い求める工夫を凝らしました。そこで、【史料4】に札幌市中職業別戸数（明治6年）を掲げましたが、建設関係、食品関係、旅籠・料理屋、貸座敷がこれに次ぎ、その他の商業ではダントツ荒物屋が多い、といったような社会を実感出来るような客観性を持たせたいつもりです。

明治32年（1899）、北海道区制のもと自治を伴った札幌区制が施行され、はじめて区会が設置され、区会関係史料は市史執筆の好史料となりました。札幌市民の自治への要求はすこぶる強いものがあり、日本資本主義の成立期に札幌の人々が試行錯誤していた実態を行政面と都市機能整備面から究明したつもりです。

日清戦後から第一次世界大戦期にかけての札幌区は、商業を第一とする産業構造から工業を第一とする産業構造へと転換を

【史料4】札幌市中職業別戸数(明治6年6月)

◆建設関係 (149戸)
大工50 土方28 土工22 木挽職19 鍛冶10 請負人5 材木屋4 鋳物師2 左官2 表具2 銅屋1 屋根普請1 附木1 桝挽1 畳刺1
◆食品関係 (47戸)
菓子・餅11 五十集11 豆腐10 濁酒3 八百屋3 蕎麦屋3 煮売2 味噌・糍2 穀物1 寿司屋1
◆旅籠、料理屋、貸座敷 (70戸)
貸座敷29 料理屋23 旅籠屋16 木賃宿1 居酒屋1
◆その他の商業など (219戸)
荒物屋183 髪結14 小間物6 風呂屋5 小商2 太物2 仕立2 紺屋1 薬湯1 塗師1 桶屋1 下駄1
◆運輸 (22戸)
馬追21 漕漕1
◆不明 (1戸)
合計508戸

「市民商業惣高取調」(新札幌市史 第6巻)より作成。

とげます。【史料5】は、大正9年わが国初の国勢調査が実施され、『国勢調査報告』をもとに札幌の有業者の産業別人口を示したものです。札幌区と「七町村」を足したものが現市域の人口ですが、工業がもっとも高く、次いで商業、公務自由業となっております。人口の多い割には経済力の低い町・札幌の成長過程を道内主要都市との比較で見る手法を用いました。【史料5】は、第一次大戦後の札幌を象徴する数値を示した好史料といえましょう。

【史料5】本業者の産業別人口(大正9年)

	札幌区	小樽区	函館区	旭川区	七町村	現市域	北海道
農 業	2,043人 5.5%	1,512人 3.7%	1,175人 2.2%	1,583人 6.0%	14,032人 65.0%	16,075人 27.4%	483,921人 45.5%
水 産 業	119 0.3	651 1.6	5,971 11.0	38 0.1	44 0.2	163 0.3	89,689 8.4
鉱 業	211 0.6	129 0.3	129 0.2	25 0.1	229 1.1	440 0.7	39,378 3.7
工 業	13,540 36.5	9,704 23.7	13,609 25.0	6,415 24.4	1,891 8.8	15,431 26.3	139,605 13.1
商 業	9,805 26.4	13,700 33.5	15,504 28.5	6,394 24.3	944 4.4	10,749 18.3	121,976 11.5
交 通 業	4,207 11.3	7,041 17.2	9,305 17.1	1,978 7.5	573 2.7	4,780 8.1	65,417 6.2
公務自由業	4,794 12.9	3,080 7.5	3,959 7.3	8,422 32.0	1,667 7.7	6,461 11.0	49,188 4.6
そ の 他	6,666 17.9	7,090 17.4	8,267 15.2	3,135 11.9	2,222 10.3	8,888 15.1	73,740 6.9
合 計	37,143 100.0	40,859 100.0	544,74 100.0	26,324 100.0	21,602 100.0	58,745 100.0	1,062,914 100.0

1. 「七町村」は豊平町、札幌村、篠路村、琴似村、手稲村、篠岩村、白石村。
2. 「その他」は「其他ノ有業者」「家事使用人」「無職業」。
3. 内閣統計局「大正九年国勢調査報告」第47巻(北海道)より作成。

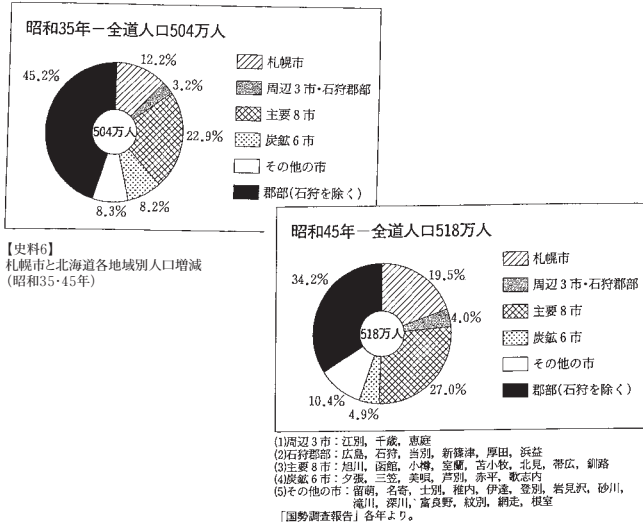
大正11年（1922）、市制が施行され、敗戦時には、現市域人口も29万人へと大幅増加、すでに函館・小樽を抜き北海道第一位となり、政治都市が戦時金融統制のもとで、小樽に対する札幌の地位の向上（日銀札幌支店）等、名実ともに政治経済の中心に移行した時期を活写し、また戦前の無産運動・農民運動・女性の問題・アイヌ民族の問題等についても新しい史料を駆使して書き込んだその意義は大きかったと思います。

### Ⅲ 現代(通史5上・下)ー市史研究・同時代史への挑戦

戦後の混乱期・占領期の史料として、当時公開されたばかりのメリーランド大学プランゲ文庫資料(国立国会図書館蔵)を占領・労働組合・教育・文化等々に駆使できました。市民生活の様相では、行政資料ばかりでなく、前の時代から用いて来た豊富な新聞資料を十二分に活用して具体的な市民の姿を描くことが出来ました。

市の財政に関しては、「章」に昇格させ、正面から取り扱うことが出来ました。政令市以前では、急激に拡大する市街地対策として道路整備・区画整理・団地造成・住宅建設費、下水道事業費、「スシ詰め」教室の解消のための学校建築費の膨張、また民政関係では、炭鉱離職者を対象とする生活保護費の増額等の重点施策が目立ってきます。また、政令市以後では、特にバブル経済崩壊後、市税の減収、かわって地方交付税と「市債」依存度が高まり、ついには「財政危機宣言」に至るといった、自治体の抱える問題を同時代史でありながら、遠慮せずに書き込むことに努めました。

【史料6】は、札幌市と北海道各地域別人口増減を昭和35年と昭和45年で比較したものです。札幌市と周辺三市(江別、千歳、恵庭)・石狩郡部を含んだ札幌圏と札幌圏をのぞく全道各地域とを比較した場合、昭和35年では、札幌圏が78万人、シェアでは15.4%、その10年後では、23.5%となり、一極集中が加速する予兆をみせているのが解ります。特徴的なのは、「主要8市」と「その他の市」で増加を見るも、「炭鉱6市」と「郡部」が目立って減少傾向にあることです。このうち「炭鉱6市」は、エネルギー革命による石炭産業の不振を直接受け、昭和36年頃より「炭鉱6市」より炭鉱離職世帯を中心とする札幌市への人口流入が相次ぎ、38年に約1万4000人とピークを迎え、その後も1万人近くの流入者が占めています。



札幌市域人口は、敗戦時29万人の中規模都市でしたが、100万都市へそして現在189万5000人へと膨張を繰り返して来ました。戦後の町村合併も大きな要因の一つですが、それだけではない、札幌市と周辺3市（江別、千歳、恵庭）及び石狩郡部（広島、石狩、当別、新篠津、厚田、浜益）を含んだ札幌圏への一極集中の一方、道内各地がやせていく、すなわち過疎の進行をもたらしているのが読みとれます。札幌市は、炭鉱の閉山・第一次産業の就業人口の減少等々北海道の抱える問題を一手に抱え込んだ都市という性格も見逃しには出来ません。

1980年代から、「都市研究」が活発化し、札幌市を対象とした研究事例が報告されるようになりました。都市形成・都市機能・都市性格など都市データ分析・診断です。

『成長都市—その特性分析—』（北海道大学ミックス研究会・昭和57）、『札幌都市研究』（札幌都市研究センター）1～9号（昭和61～平成14）、蝦名賢蔵『札幌市の都市形成と一極集中』（平成12）などは、札幌の都市研究を深化させ、都市研究・都市史研究の時代を迎えたことも一つの特徴です。

昭和47年の政令指定都市へ移行直後のデータをもとに全国主要都市別中枢管理機能を分析した一例を紹介しておきます。

- （行政的機能）東京、札幌、大阪、名古屋—（2番目）
- （経済的機能）東京、大阪、名古屋、京都、横浜、神戸、福岡、札幌—（8番目）
- （文化・社会的機能）東京、大阪、名古屋、京都、福岡・札幌—（5番目）
- （総合的機能）東京、大阪、名古屋、札幌—（4番目）

札幌市は、中枢管理機能を構成する各機能のうち行政的機能が格段に高く、それらの集積が、多くの継続的・就業・就学機会を生み出し、第三次産業の利益を求めて札幌市への人口集中の大きな要因ともなっている、ということが分析されています。

最後に、【史料7】として、戦後札幌市の主要長期計画一覧

【史料7】戦後札幌市の主要長期計画一覧

計画期間	計画名	目指す都市像・課題	開始時の市人口・総事業費
昭35～44	主要事業10年計画	都市の骨格となる基礎施設の整備	62万人・332億7,500万円
40～45	札幌市建設6年計画	急増する人口への対応	82万人・3,350億円
42～46	札幌市建設5年計画	北の拠点都市国際都市としての基礎づくり	90万人・6,021億円
46～65	札幌市長期総合計画	北方圏の拠点都市、新しい時代に対応した生活都市	
46～51	第1次5年計画	都市の高度化と地域格差の是正	106万人・3,400億円
51～70	新札幌市長期総合計画	北方圏の拠点都市、新しい時代に対応した生活都市	
51～55	第1次5年計画	市民生活の質的向上	128万人・8,020億円
55～59	第2次5年計画	地域の個性を生かす街づくり	140万人・1兆8,270億円
59～63	第3次5年計画	分区への対応と21世紀への足固め	152万人・1兆3,680億円
63～平19	第3次札幌市長期総合計画	北方圏の拠点都市、新しい時代に対応した生活都市	
昭63～平4	第1次5年計画	都市環境の整備と充実	162万人・1兆4,890億円
平4～8	第2次5年計画	躍動都市さっぽろの実現	172万人・1兆8,700億円
8～13	第3次5年計画	北の理想都市サッポロの実現	177万人・2兆3,600億円
12～32	第4次札幌市長期総合計画	北方圏の拠点都市、新しい時代に対応した生活都市	
12～17	第1次5年計画	人輝き、心響き合うまちさっぽろの実現	183万人・1兆8,700億円

【札幌市局別事業概要】（平14）、各計画書。総事業費は計画値。

を掲げておきました。急激な都市化（人口増と市街地拡大）に伴って生じた環境悪化に対応して、市が推進した都市計画が一望できる好史料です。

Ⅳ 年表・索引編を紹介いたしますと、15世紀～2000年を対象に、明治以降は、政治・行政、産業・経済、社会・生活、教育・文化・宗教の四分野別、掲載事項数、約2万件、各事項に出品を付記、出品資料数4124点（うち新聞資料12点）、索引編は、事項・人名の二種からなるインデックスです。詳細は、『札幌の歴史』54号の西田秀子編集員・橋場ゆみこ編集員による経過報告に譲ります。

Ⅴ 史料編・統計編の活用をお願いするとともに、今後の課題として、①長期計画のもとに「市史史料集」の継続的刊行、②収集した史料や、市の行政資料を「資料館」を開設して一般公開、③市民が所蔵している古記録・資料等の寄贈のお願い・呼びかけ、④「市史を読む会」等を立ち上げ、地域のもつ歴史・文化を学ぶ講座の開設、⑤『札幌の歴史』にかわる雑誌の刊行、⑥市史編集室の常設化、地域史編集のセンター的役割…6点を掲げました。以上で基調報告を終わらせていただきます。

## 『新札幌市史』を どう継承するか



北海道史研究協議会会長

田端 宏氏

●田端：『新札幌市史をどう継承するか』をテーマに掲げましたが、これがなかなか大変なことです。編集長の方から、まとめとして挙げられたこととまったく同じことを、わたしのレジュメにも掲げております。

まずひとつめ。『新札幌市史』は9882ページありまして、約1万ページになります。『新北海道史』をご存知の方も多いと思いますが、ページ数は9534で『新札幌市史』の方が多いんですね。

『新北海道史』も17年ほど掛けて編集されましたが、『新札幌市史』と全体の構成も似た感じで、研究を重ねながら通説編を書いており、それと併せて機関誌『札幌の歴史』の刊行を続けて来たのも似ています。

『新札幌市史』は通史が刊行されるたびに、それを紹介される文章に、「豊富な内容」「多様な内容」が特長として書かれることが多かったようです。

北海道における札幌への一極集中は極端で、本州に比べると東京首都圏と名古屋周辺に次ぐぐらいです。札幌とわずかな都市を除いては、過疎地域の指定を受ける町村ばかりが周りである。『新札幌市史』を研究することで一極集中の謎を解く鍵が見つかるかもしれないと『通史五（上）』を紹介された蝦名先生は書かれていました。

一極集中の状況を研究した「最高水準の都市研究」と評価される内容なのです。

統計編は内容豊かだと評価されています。人口統計など基本的なもののほか特徴的な細かい事項をよくとりあげている、と永井秀夫先生は紹介されています。例として次のようなことに触れています。札幌は当時、結核患者は全国一だったようです。人口比の多さは札幌全国一。気候条件、医療技術のことからやむを得なかったと推測されます。

通史5の下では、同時代史を扱っています。歴史的評価は困難ですが、資料となるモノをあげています。現代になるほど、いろんな事象を直接知っている人がいる中で同時代史を書くことは間違っていけないので大変だったと思います。資料、参考文献だけでも数ページをあげている章もあります。これは今回のシンポジウム「史料から歴史を探る」にも通じるのですが、歴史を知るために史料を把握すること、これなしには歴史は探れません。参考文献資料目録としての意味があるような書き方も貴重なものだと感じました。

『新札幌市史』を精読して、生かそうと思ってもなかなかそうはいきません。わたしはある程度精読したといっても、近世、通史5の下、史料編1と全体の3分の1程度。多くはこの後に生かされるはずですが。長い年月をかけているんな人の読み方で評価が定まってくるでしょう。

次に「新札幌市史の市民化」について。これは君尹彦先生の言葉です。市史の内容が多くの人々の間で生かされるようにすることが大事だという意味です。

札幌市文化資料室では、工夫してすでに様々なことをやっているんですね。地域の史料をまとめたいという方ための「郷土史相談室」。「文化資料室ニュース」では、おもしろいニュースを探し出して、市史のトピックを編集して無料の広報誌を発行。子どもたちを集めて札幌市史の勉強をさせて、郷土の歴史新聞を作ろうというジュニアウィークエンドセミナー。

編集の過程で蓄積された資料の保存・管理・公開。資料室で

所蔵している資料は11万7000点あまりと公表されています。貴重な資料に接した方は多いと思います。保存・管理そして公開をどう続けていくか考えないといけません。

市史研究や史料収集を続け、継続する必要があります。いままでも機関誌・研究誌が発行されていましたが現在はありません。その担い手、後継の機関誌、研究誌を継続的に発行して欲しいですね。史料編の編集、史料編に登録すべき内容というのは、市史編集室にもその周辺にも山ほどありますから。

最後に文書館設立を希望します。公文書を系統的に集める仕事は絶対的に必要です。公文書館なしに民主主義なし。極端な言い方ですが、そういう方が居ます。

大久保昌一先生は「民主主義は都市論の中核」ということをおっしゃっています。大阪大学で都市論を研究している方です。その先生の記述にあったことを考え方の一つとして聞いて欲しいのですが、都市論の中核というのは、生活環境とか、自然環境、居住環境、一般的に生活利便性のほかにもテーマはたくさんある。最近では都市景観など。でも、不動の中核は平和と人権と民主主義だと。札幌という都市を考えたとき、まず、平和でないと都市は崩壊します。こういう中核はとても重要だと思います。

政治行政の世界では、しばしば記録資料や文書が軽視されます。

C型肝炎の汚染薬剤、社会保険庁の年金記録、自衛隊の給油活動の記録、ロッキード事件の最高裁における記録紛失事件など、そういうことがまかり通っているときに行政の説明責任ということを厳しく考えなければなりません。

行政の説明責任は文書館にかかわってよく語られます。つい最近、道議会の予算特別委員会で文書館に関する質問をしてくれた議員がおりまして、それに対して道の総務部長は「行政の説明責任のために」という表現をして「文書館の重要性は認識している」と言われました。直接傍聴しました。文書館の必要性を行政マン自身が語らないといけない時代になっているんですね。文書館なしに民主主義はあり得ない。極端な言い方ですけどね。

文書館は札幌市の場合まだありません。行政史料は、ちゃんと保存・管理・公開されないといけません。情報公開の法律ができ、2001年国立公文書館への移管が格段に落ちていきます（参考資料：読売新聞 平成17・2・6 掲載記事『「記録散逸」に危機感』、週刊現代『リレー読書日記』加藤陽子著「公文書館の諸問題」）。公文書を公開されるのを嫌った様子が露骨に表れてビックリです。

公文書の保管管理が無視されるのは心配です。行政の説明責任の裏付けとしての文書の管理ができるかどうかは、札幌市でも大問題のはずです。

多くの方が文化資料室を訪れているのは、歴史は面白くて、本当のことがわかったような気がするからです。なかなか本当のことはわからないんですが、わかったと思えるまで調べることが大切です。なにを大事に思うべきか考えるには、史料を通じて考えることが必要です。そのためにも文書館はぜひ必要。それに必要なスタッフも市史編纂の過程で、十分研鑽を積んだ方がおられるので実現は可能なことだと思われまます。

# 史料の発掘と 伝承 ～札幌市白石区の あゆみから～



白石の歴史を語る会  
会長  
太田 幸雄氏

●太田：歴史の上では史料の発掘と、それをどう伝えていくかが大切です。白石の歩みを中心にしながら、どんな活動をしてきたかをご報告します。

白石村の誕生から、札幌市白石区へどのような歩みをしてきたか。これは仙台藩白石領、片倉小十郎の領土なのですが、戊辰戦争の結果、領土を削られ、南部藩が入ることになり、土地も家屋も明け渡さなければならないという苦境に陥った。そこで片倉家としては論議の結果、蝦夷地に移住することに。

太政官からは片倉小十郎に対して、胆振国室蘭郡字ホロシヨシケの支配を命じられ、片倉小十郎の家臣達は2回に分けて移住しました。自費移住ですから、あちこちに借金をして、白石城も売り払っての移住です。しかしお金が足りず、600名ほどが残され、その日暮らしも大変だったようです。その頃、開拓使が移住民を募集していることを知り、北海道に移住することになり、貫属として札幌郡への移住を命ぜられました。それが明治4年4月でした。

ところが、いつまで経っても迎えの船が来てくれません。ようやく9月になって1隻の船が来るので400人乗りなさいと役所から通達されるのです。そこで9月7日に白石を出発して、松島湾の寒風凜をめぐりて移動しました。乗った船は威臨丸。17日に函館へ入港し、20日には函館を出港しましたが、上磯郡泉沢村更木で座礁して沈没。そこから函館に戻りまして、次の200名が乗ってきた庚午丸に乗って小樽に上陸しました。

小樽に着いたところ、岩村判官から、まだ家が建っていないから来春まで石狩に滞在するよう命じられました。全員が石狩に行くのですが、アイヌが住んでいた小屋とか漁師小屋とか粗末な物しかなくて、狭いところにすし詰めにされていました。寒いので生木を焚く、すると目が悪くなる。どうにもならないということで、最月寒川の現在の白石の地に入りました。

役所では最月寒村と呼んでいましたが、真冬なのに家を建てて頑張っている姿を見た岩村判官が、「あなた方の故郷である白石村という名前を付けなさい」と言って、札幌郡白石村となったのです。ところが、明治14年、太政大臣三条実美から開拓使に向けて、「勝手に字名を変えてはいけない」と通達が届く。もし、白石に10年入るのが遅かったなら、現在の白石区はなかったと思われます。

入植者は農業を中心に村を築いていきますが、昭和25年に札幌市と合併します。当時の白石村は現在の厚別区も含んでいました。札幌郡白石村は、札幌市白石町に名前が変わり、その後政令都市になって札幌市白石区になり、やがて厚別区と分かれて若干白石区が小さくなる。そんな歴史をたどってきています。

最初に史料が公にされたのは大正10年に白石村役場が発行した『白石村誌』でした。これは開村50年記念に発刊され、70年記念にも村誌を発行。やがて『白石発展百年史』『白石歴史ものがたり』とか、『輝く白石・厚別120年の人びと』という歴史書が作られてきました。

平成5年度から白石区役所とタイアップし、まちづくりの一貫として、白石の歴史をしのばせる名所旧跡を表す表示板を設置しました。『白石歴るべ』と言われております。その調査が、白石の歴史を語る会に依頼され、20ヶ所の候補から7ヶ所に設置。現在は34ヶ所に設置されております。それを伝えるにはどうしたらいいかと、発掘した資料をもとに『マンガ史 白石ものがたり』とか『白石歴るべ』などを作って、白石の歴史を知っ

てもらおうとしています（※資料1）。

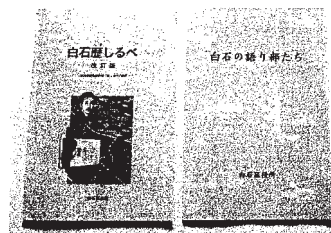
白石の歴史を語る会は、平成5年8月10日に歴史の研究者達が中心となって発足しました。日頃から地域をまわっては、お年寄りに昔の話を聞いたり、情報を収集して、録音テープや印刷物にまとめています。いままでには歴史講演会は年1回程度ですが、その結果も冊子にまとめています（※資料2）。

歴史ウォッチングといひまして、年1回、実際に現地を歩いて歴史を調べてみようという動きをしてきました。ガイドブックも作成しております。その後、白石の年表作りをして、明治編・大正昭和初期編・昭和25年以降の白石年表を作りました（※資料3）。

白石の資料を発掘するのはこれからも続けていかなければいけないと思いますが、いままで抱えてきた歴史も本当にそうなのか立ち止まって考える必要があると思います。

たまたま『白石村誌』という大正10年の項を調べていたところ、その前に書かれた村史があることを知りました。それが町村史資料というもので、『札幌の歴史』の中に、早い段階で所収されていることがわかりました。それを調べていくうちに、『白石村移住顛末』という本が明治25年に出されていることがわかりました。いままでそうだったと言われていたことが、違うこともありました。これからも歴史の資料の発掘と調査に努め、みなさんにどうやって伝えていくかを課題に、活動を続けていきたいと思っています。

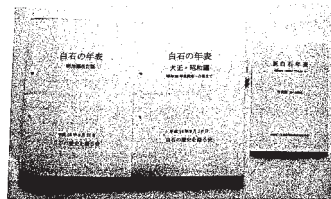
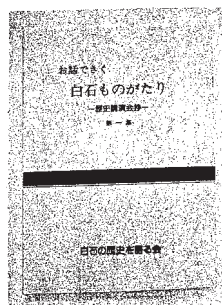
## 資料1



## 資料3



## 資料2



# 地域資料の 積み重ねを



手稲郷土史研究会会長代行  
**茂内 義雄氏**

●茂内：太田先生のお話を聞きながら、同じ片倉家が手稲にも入ったわけで、そういうお話しをしようかと思いましたが間に合いません。私なりの話をさせていただきます。

手稲郷土史研究会は、2年前にできたばかりです。ようやくヨチヨチ歩きの新参者でございます。この会が設立されるに当たりまして、大変な思い入れ、現在の活動状況、いろいろお話ししたいのですが、限られた時間なので端折っていきたく思います。

今年度、手稲区では手稲区役所のみなさんが、手稲区の各学校にある郷土史料1200点以上すべてをデータベース化されました。4月に公開されます。

会の活動につきましては、どこの地域でもやっていますが、子どもたちの学習資料作りの一貫として、郷土読本、副読本作りに携わりました。また、地域のおじいちゃん、おばあちゃんにお話しを聞いています。そのまた前の先祖の方々は大変な苦勞をしまして、片倉家の方もそうでしょう、決死の覚悟で北海道に移住してきたわけです。内地、国元（母村）との交流を大事にしながら、地域に生かしていきたいという願いを持ってここに書きました。

さて、一番お話しさせていただきたいのは資料発掘の一事例です。

「手稲に昔々飛行場があったとき」というフレーズで始まっています。手稲で生まれ育った80代ぐらいの人は、それを聞いてなんとか頷いてくれます。しかし、記録も確証もありません。大げさな言い方ですが、それでは歴史にならないと言う人もいるかもしれません。

5～6年前、文化資料室がまだ札幌資料館の時です。そこに所蔵している新聞史料から、3点ほど手稲の飛行場についての記述を見つけました。手稲住民としてうれしかったです。簡単にお話をさせていただきます。

昭和7年、軽川の空に北日本飛行学校という小さな訓練機が飛び回っておりました。

その頃、札幌と東京を結ぶ定期航空路開設が熱を帯びてきたときです。軽川も一枚かんでいるんです。記述から読みとれました。村民こぞって小樽に向かい、小樽の実業界と一緒に誘致運動をするのです。軽川には線路の下辺りに飛行場の建設予定地も確保していました。しかし、地の利というか、うまくいかなかったようで、昭和8年、前々から用意していました北24条に札幌飛行場ができるわけです。

3点の資料から、昭和8年に北日本飛行学校は札幌飛行場に移ります。それで手稲に飛行場はないわけですが、その飛行場がいつできたか知りたかったんです。写真資料も2枚だけで、軽

川という文字が読みとれるだけの写真は、灯台もと暗しでしたが、地元で発掘されました。大勢の人が映っている写真、恐らく飛行場が開設されたときの写真ではないかと思うのですが、どこのか、いつなのか、推測はできましたが確証はもてませんでした。幻の事象ですよ。

そんな気持ちで居たところ、「この写真に私が写ってますよ」と94歳のおばあちゃんから一報をいただき、つい先日お会いしてきました。レジュメができた後のことです。

おばあちゃん曰く「私は昭和5年の3月に札幌の庁立高女を卒業したのです。そして翌昭和6年5月21日、18歳の時、縁あって札幌にお嫁に来たんです。10歳も年の離れた妹が操縦士に花束を贈呈する役、姉の私と父親とがこの晴れがましい場に出席したのです」と。

場所は現手稲駅北口の真っ直ぐ行ったところ、曙4条3条の1丁目界隈です。推測はできていましたが、おばあちゃんは「間違いなく行った」と言ってくれました。写真を拡大して持ってきてみると、見にくいのですが、「これが私です」と真ん中の白い着物姿を指差してくれたのです。

着物を着て、羽織を羽織っているというのは、貴重なお話でした。「羽織を羽織るなんて、北国の雪が溶けて札幌の春を告げる神社三吉さん、三吉神社のお祭りは5月14、15日です。祭りの時には春のぼかぼか陽気で、羽織なんか付けませんよ。だから、わたしが女学校を出たのが昭和5年でお嫁に行くのは昭和6年5月なので、この写真は羽織を付けているから雪が溶けた直後の4月の半ばだろう」と言ってくれたんです。

帰路に就きながら、まだどこかに埋もれている飛行場の資料はないかとばかり考えていました。

できることなら、新札幌市史がいつの日か改訂される日には、手稲の飛行場について記述をしてもらいたいものです。小さな小さな手稲に関する飛行場ですが、それがあって札幌市の年表になるのではないかという思いがあります。これからそんな気持ちで手稲の郷土史研のみなさんと動いていきたいと思ひます。



**北海道航空義  
合格納庫**

近く移轉完成

軽川の北日本飛行学校は、今般に飛行場に移轉すると同時に北海道航空義行會と改めたが、格納庫の移轉工事は本月末迄には完成の筈である

**手稲山麓（野）  
外演習**

札幌市手稲村では昨年下野五十年記念事業として今十六日十七日の兩日、金谷中隊演習、在郷軍人分會等聯合の下に手稲山麓に於て野外演習を行ふこととなつたが、月夜二十五聯隊からは、一個人隊と機隊の應援ある山崎十六日夜には北日本飛行学校の飛行機が出勤し壯なる防空演習を行ふと

北海タイムス (昭和8・7・27)

北海タイムス (昭和7・7・16)

史料発掘の経緯	
昭和57年11月	<p>「郷土誌まえだ」発刊（前田小学校開校5周年記念）</p> <p>刊行数年前から地域の資料収集</p> <p>・「手稲記念館」（西区西町）に飛行場開設時と思われる写真発見（時も場所も特定できず、複製機前に着飾った人達）</p> <p>・飛行機に乗って一周したという人（近藤安彦翁から聞き取り）</p> <p>・『手稲町誌』（昭和43年）付録所収「札幌郡手稲村（大字三村時代）地図」（昭和8年10月編集）に現郷地区辺に飛行場の記載あり</p>



## 行政の視点から



札幌市政推進室長  
石黒 進

●石黒：市史編纂をお願いしてきた行政の立場から簡略にお話をさせていただきます。

全8巻10冊、約1万ページという市史を完結させていただいたことに感謝を申し上げます。

昭和56年に新札幌市史編集室を設けてから、27年間という長い歳月を掛けて今日完結することになりました。この27年間には、最初の編集長の高倉さん、現在は海保さんでございますけど、編集長は4人、編集員は23人、編集協力員は32人にのぼる方々に携わっていただきました。

最初は全く資料がない、ゼロからのスタートでございまして、膨大な資料を発掘・収集し、それらを調査・分析して書き上げていただくという大作業でございます。正確な市史を作っていたらと思っております。

せっかく市史ができたのですから、できるだけ市民の方に利用していただきたい、見ていただきたいと思っております。全部に目を通すのはできないかもしれませんが、興味のある分野について調べてみようという機会をぜひ作っていただきたいものです。

また、市史だけでは目を通せないこともあるかと思っておりますので、これからは簡略化した概要版を作成するとか、地域での取り組みの中で紹介されたように、わかりやすい子ども向けの教材を作っていくなど、工夫をしていかなければいけないと思っております。

昭和56年刊行の際、高倉新一郎編集長が「この事業は、単に先人の遺産を後世に伝達するにとどまらず、札幌が将来に向かって発展していくための羅針盤として役立たせるべきである」と述べておられます。

田端先生のおっしゃる通り、この市史は都市研究的な性格を併せもつもので、我々行政に携わる者としても政策形成や施策の執行に当たりまして、こういった市史を活用して都市計画に活かしていかなければ、せっかく立派な市史を作った意味はないのではないかと思いますので、そのように努めていきたいと思っております。

市史が完結し、先ほどお話もありましたが、機関誌『札幌の歴史』も終巻を迎えました。では、文化資料室はこれから何をするかということになります。

文化資料室では『新札幌市史』の編纂を通して、貴重な資料をたくさん収集・保存してまいりました。こういった公文書をはじめとする記録資料は、市民を含めた札幌市の存在意義を示すと共に、市街での諸活動の実態を浮かび上がらせるものでありまして、適切な分析と活用を行うことにより、札幌市のまちづくりには有益なものとする事ができると考えております。

市史で紹介されている史料はほんの一部です。100%の史料があるとするれば、文字化されているのは1%ぐらいにしか過ぎません。あとの99%は史料としてのみ残っているわけでございます。市史で紹介できなかった史料について、市民のみならずはもとより行政内部でも効率的に活用できるよう、整理保存そして公開していくというのが今後の課題になろうかと思っております。

先ほど、地域での郷土史の取り組みについてお話がありましたが、文化資料室だけではなく、各地域の歴史研究とタイアップすることで、重層的な歴史研究につなげていきたいと思っております。

文化資料室には市民から寄贈された開拓使時代の史料ですとか、いろんなものがございます。ぜひ地域の郷土史研究をされてい

る方々にも活用していただきたいと思っておりますし、地域の中でこれらを普及・啓発していただきたいと思っております。

●榎本：予定を変えまして、海保編集長をはじめ、将来に向かってのお話がありましたので、地域から札幌市そのものに対する要望・希望、お願い程度でも構いませんので、太田さん、茂内さんから一言ずつお願いします。

●太田：地域を勉強するときに疑問がたくさん出てきます。そして、どこで相談したらいいかという問題が出てきます。資料室では懇切丁寧に相談に乗ってくれて、史料についても教えてくれる。研究するのに非常に役立ちます。今後も気軽に相談できる、そして史料がしっかり確保してあることを続けて下さい。

●茂内：太田先生と同じですが、元の豊水小学校に行ったら、いろんな史料があると、文化資料室の紹介をしたいと思います。私自身が思うことですが、文化資料室には新聞史料がたくさんファイルされております。札幌市資料館時代は奥まったところであって、取り出すことができなかったんですが、まず「文化資料室で、史料を手にとって必要なところを読んでみたらどうですか」と言いたいです。

●榎本：ありがとうございます。最後に、日本史的立場といたしますか全国的な立場から、ご感想・アドバイスを山本先生からいただきます。

●山本：お話を聞いていて、太田先生、茂内先生の地域の歴史を発掘する熱い思い、編集長の長い努力、資料館を是非設立したいという田端先生のお話、感銘を受ける話でございました。

北海道とくに札幌は新しい町ということで、探しても江戸時代の史料はないだろうと思いがちなんですが、何年も史料を探しているうちに、どんどん発掘されてきています。日本史においてもアイヌ史は大きな分野になっているので、そういう意味では地域での史料発掘の努力は大きな意味を持っている。

沖縄はもともと史料が豊富でしたが、第2次世界大戦で大きな戦火を浴び、地元に残っているものは非常に少なくなりました。10年ぐらい前に4年間、筑波大学の岩崎先生が代表を務めて歴史情報研究をしたことがあります。そのとき全国からいろんな沖縄関係の史料を集めました。地域の史料を発掘すると共に、地域のことを書いてある全国的な史料も発掘していく。その中で、その地域が浮かび上がるようになる。そんな経験をしました。

この『新札幌市史』は、非常に大きな役割を果たしていると思っております。白石区のように先人の苦勞がしみこんだ土地というのは、その経験を子どもたちに話してあげたい気もします。また、北海道にはアイヌの人々が暮らし、独自の文化を育んでいます。そういうものを総合した歴史が、今後ますます必要になってくると思っております。その中核を担うのが『新札幌市史』ではないでしょうか。いままでやってきた蓄積の作業を絶やさずに発展させるため、田端先生がおっしゃったように、資料館等の建設が実現になれば非常に我々としてうれしく思います。とにかく、みなさんの熱い思いが伝わってくるシンポジウムだったと思っております。

# アンケート調査結果

当日、来場者の皆さまに、受付にてレジュメ等とともに自由記入式のアンケートを配付し、今回のシンポジウムや当室の活動などに関するご意見・ご感想をいただきました。

来場者数 約200人

回収件数 43件

回収率 約21%

紙面の都合上全てを掲載することはできませんが、一部を抜粋して原文のまま掲載させていただきます。

## 〈全体〉

- ・札幌市史完結をとおしてのディスカッションの貴重なお話しで、現在は札幌市民としてではありませんが、北海道人としての（郷土意識）を高めることができました。
- ・未来に向けて具体的な方向と提案が出て大そう一市民として嬉しく元気をもらいました。ありがとうございます。

## 〈講演会〉

- ・山本先生の講演は楽しかったですね。よく理解できました。小説でない歴史というのもたまにはいいものだと思います。
- ・篤姫と札幌の歴史にどんな関係？とっていたが、史料から細かなことを読みといてゆくのだとわかりました。

## 〈パネルディスカッション〉

- ・「新札幌市史をどう継承するか」のテーマに必ずしもフィットしてない内容だった。
- ・各パネラーの報告が冗長で、手許資料にあることの再説明は時間がもったいなかったですね。パネラーの真意は概括説明ではなく、苦勞した点の説明ではなかったかと思います。長い年月の活動の成果の発表ですから、充分の時間を割いて、印象的な問題点の苦勞話などの方が良かったように思います。時間の制約があるだけ、シンポジウムの組立方が大事だと思います。あれだけの人が集まったのですから、あるいは新資料が発見されたかも知れませんが、次に来るべき続行事業についての提言もあったかと思惟します。
- ・白石、手稲の例にみるように、各地で掘り起こされている町史など貴重な地域の歴史をもっと識りたく思いました。

## 〈新札幌市史について〉

- ・「新札幌市史」の刊行意義を再認識することができた。
- ・市史最後の巻（年表・索引）大変貴重な資料ですが、札幌の人々の生活に根ざした記述が少ないのが残念…特に文化財に関する記述が小さな文字で表記、日本全体の政治（行政）事項がゴシック体なのは何故でしょうか。

## 〈今後の活動など〉

- ・札幌市も130年の歴史を重ねましたが、残念なことに札幌のことを知ろうと思っても資料が集中されていません。これだけの都市になったのですから、歴史博物館（市立文書館）を設置してほしいものです。今の様にあちこちに散在しているのではなく、博物館に行けば用が足りるという形が望ましいと思います。
- ・再度、一般市民向けに「講演会」等の開催を期待します。
- ・歴史に興味のある人だけの範囲にとどまることは残念です。高校、大学の生徒達への啓発は勿論、つねに市民講座を積み重ねることによって、一般への影響を強めることが大きな方向ではないでしょうか。

ご回答ありがとうございました。今後の参考とさせていただきます。

発行日／平成20年(2008年)9月

編集・発行／札幌市総務局行政部文化資料室

〒064-0808 札幌市中央区南8条西2丁目  
Tel.011-521-0205 Fax.011-521-0210

